

空海以降の真言密教と公益観について

— 小林正盛「真言宗より見たる社会事業」を中心に —

研究生 寺山 賢照

昨年の発表「真言密教における公益性」では、弘法大師空海の先進的な公益観、対社会的に実践的な発言について明らかにした。この空海によって示されていた公益観が、没後どのような形で継承されていったのかを辿ることが現在の筆者の研究テーマである。

そこで本発表は、戦前期真言宗の社会事業における公益観を明らかにするため、一九二〇（大正九）年発刊された佛教徒社会事業研究会編『佛教徒社会事業大観』に収録された、真言宗豊山派の僧侶である小林正盛僧正（一八七六一一九三七）の論考「真言宗より見たる社会事業」を取り上げ、著者の社会事業観に見られる公益観について検討した。小林正盛は明治から昭和前期にかけての真言宗豊山派の僧侶であり、宗務長などをへて一九三〇（昭和五）年長谷寺化主となった人物である。宗務長時代に「豊山派の存在は社会に貢献する事」と社会事業についての所信表明を行うなど、「豊山派社会事業の中心人物」と評価されている人物である。

読解・検討の結果、以下の三点の特徴が指摘できる。

第一に、社会事業について、真言宗宗団の運営事業としては必ずしも優先的ではないが、しかし思想的、精神的に

は深く関係し、意義を持つと主張している点が挙げられる。これは真言宗そのものの起因が「社会現象其のものを起点として直ちに深遠の意義を認め、其処に人生の真生命を開拓し、向上する」点にあるためである。その説明として宗祖空海の事績を挙げ、また、社会事業を「即身成仏」「十住心思想」と関連づけるなど、空海的事績・思想が、真言宗の公益観の根本に位置づけられていることが窺える。

第二に、真言宗の社会事業における動機が「内観的精神修養の結果」と位置づけられている点である。精神修養を十分高めて、人生を完成させることが真の社会事業を可能とする前提条件と位置づけられている。またその際的心的状态を四重積を用い説明付けるなど、教学および修養と社会事業を一貫性をもって結ぶことが企図されている。

第三に精神に重要性を置きながらも、山中隠遁・世間没交渉を否定している点である。修養をすすめて真の自覚をもつて社会に接すれば、小我的個性を打開し大我的個性を得ることができ、また「宇宙の神秘」と「人生の秘蔵」に触れ、神秘の鍵をもつて蔵をひらくことができる。これこそ「真言宗より見たる社会事業」である、と説いている。

以上、三点の特徴を指摘した。宗祖の事績をなぞるのみならず、内観修養や学問的理解を通じた思想的解釈を通じて、僧侶としての完成と社会との接触の必要性を結びつけた点に、小林正盛の考える社会事業観および公益観の特徴が見られるといえよう。